

重要伝統的建造物群保存地区を抱える倉敷市東町で、秋祭りに合わせて川崎医療福祉大（同市松島）の学生有志が住民とすしを手作りし、町内の独居高齢者に配る活動を続けている。高齢化が進み地域の風習が途絶えつつある中、コミュニティーの維持に一役買っている。（山内悠記子）

倉敷で川崎医療福祉大生有志



手作りの祭りずしを高年齢女性に手渡す学生（左）

独居高齢者に祭りずし

明治から昭和初期の町家が残る東町では、阿智神社（同市本町）の秋季例大祭（10月）に合わせ、住民が祭りずしを作って近所に配る習わしがある。

2014年、同大医療福祉学科の学生らがつくる団体「e-コミュニティー研究所」が同町で独居高齢者の調査を手掛けた際、NPO法人「倉敷町家トラスト」（同市東町）の中村泰典代表理事（68）から祭りずしの伝統が厳しくなっている状況を聞いて「伝統の味と文化を守り継ぎたい」と協力

住民と手作りし届ける

風習維持に一役

に乗り出した。

地元の森美由紀さん（47）が、味に定評があった旧家のレシピを学生に紹介。今年も19、20日に同トラストの事務所

に学生5人と住民計約10人が集まり、地元の鮮魚店で購入したエビを使ったそぼろや煮アナゴ、酔レンコンなどの食材を丁寧に調理して仕上げた。学生たちは20日昼に13人の高齢者宅を訪れ、すしを届けた。受け取った80代の女性は「立派なおも手掛けている。

すしを毎年、毎年、すごいね。ありがとう」と笑顔だった。同研究所代表の3年芝原香月さん（20）は「人と人のつながりをつくる」ことができてうれしい。

同研究所は14年に発足。倉敷東学区社会福祉協議会や東町町内会など